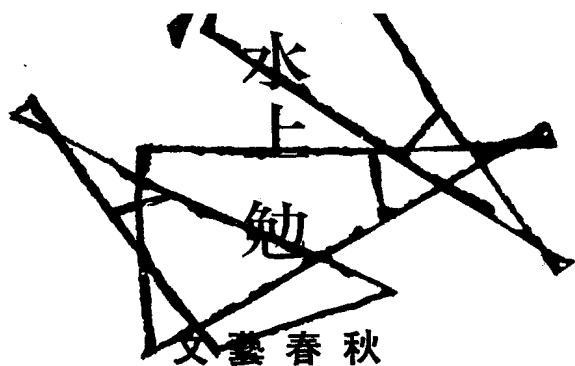


鐘の音



鐘の音 奥附

昭和四二年六月二五日

第一刷発行

定価 五八〇円

著者 水上 勉

発行者 上林 吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地

印刷 凸版印刷
製本 矢島製本
製函 加藤製函

*万一落丁乱丁の場合にはお取りかえ致します

鐘の音・目次

装
幀

朝
倉
撰

棺	破衣の人	美濃のお民	鐘の音
133	111	65	5

鴉	谷間	舞扇	竹の花
235	213	179	159

鐘

の

音

1

上泉菊野に会ったのは、七年前の冬である。

二月のはじめだったろう。田島の脚色した「鳶の歌」が映画になった際、監督したKが、作中に出てくる上七軒かみぢりけんの花街を撮りたいというので、どこか茶屋の中でそれらしい家があったら紹介してほしいと云ってきた。

音の
あいにく、田島はまだその頃は、上七軒にあそんだことはなかった。その旨返事してやると、数日して、Kは、撮影所関係からいい所を紹介してもらったといい、一しょに行ってみないかと誘ってきた。「長谷山」へ行ったのはこれが最初である。

鐘

七年前のことをはっきりおぼえているのは、Kが二年目にぼっくり死んだこともあり、心の痛む思い出ともつながるためである。だが、何より、その日菊野に再会したことが忘れられないからでもあった。

「長谷山」は、今出川から北野へぬけるせまい上七軒通りの、西へよった天神近くにある。古い京格子の戸をあけて、うす暗い土間を通り、中の間から、古びた階段下が金具のついたタンスになっているのを右にみながら、ギシギシ鳴る中廊下をわたっていった。Kのうしろから離れへ入ると、若い妓が三人と、五十前後の地方ふうの芸妓が手をついて、おいでやす、とむかえた。田島がKとむきあつて黒檀の卓を間にしてすわると、

「おぼえといやすか」

と老妓は語りかけてくるのであった。

「等持院さんにおいやした方どっしゃろ。うちはよう知ってますんどっせ。鳥原のタバコ屋さんの娘さんおぼえといやすか」

待っていたようにして老妓は、実に若々しい声でいった。田島はぼつてり肥った餅肌の老妓が、ひと刷毛^{はけ}なでたようなうす化粧をして、眼尻に散った小じわをせわしくうごかすのを、四十四、五かとみていた。

鳥原というタバコ屋はたしかに等持院の山門前にあったように思う。田島がまだ小僧の時代から、年が十四、五も上の娘がふたりいて、よく店番をしていたのを知っていた。だが三十年も前である、顔もわすれてしまっている。

「あすこの二階に石見先生がおいやしたんです。いまの奥さんとよう一しよにわたしらもよせてもらいましたんですが。あの頃、お寺で法話がありましたな。鳥原の娘さんらも、よう一しよに聴きにゆかれましたわな。……水害のあとで、松の木イがぎょうさん倒れて、中門からむこうの聖天^{しょうてん}さんの池のへんまで、茶の木が植えたりしましたやろ。おぼえてはりますか」

菊野の顔も、鳥原の娘さんの顔もおぼえてはいなかったが、茶の木には思い出はあった。中学へ入るか入らないかの年だから十二、三のはずだ。これは天王寺の五重塔が倒壊した例の関西大風水害の折の話だろう。衣笠山の池が決潰して、山を借景にした等持院の足利義政がつくった茶室も石庭も泥で埋まった。表門から中門にいたる松林は数百本も倒れて、境内は荒れ放題となった。それを取りかたづけた跡に、裸になった土しかのこらなかったで、裂けのこった松の古株など掘りおこして、あとに、老師さまは茶の木を植えて庭の体裁を保たれた。その時期である。茶はまだ苗木だった。たしか、中門近くの聖天池まで、茶の木は植えられていたように思う。子供らが踏みあらさないように、拇指ぐらいの太きの苗の上へ、田島たち小僧は

いちいち竹を割った一尺ほどの押え木を半円につききして目じるしにしたものである。

「法話も聞きにいったのかね」

「へえ、茶の本は、その時に見たんですがな」

古松の無くなったのっぺらぼうの庭に、茶の苗は半円をえがいた竹の飾りで、延々とつづいていた。表門まで茶の廊下にみえたがその道を、檀信徒は歩いて、書院に上がったものだった。いまのように観光客が、足利尊氏の墓など見物にこない頃だから、バスは表門まで入ってこない。

当時の老師さまは、元東福寺の管長さまだった本孝老師である。月の一日と十五日の祝聖しゅくせいの誦経ずきやうがすむと、正午から六祖檀経の講義がはじまった。法話というのは、そのことをいったので、小僧は、書院にあつまった五十人ほどの檀信徒に茶を出し、午ひるはおときと称して「きしめん」を出している。檀信徒にかぎらず、近くの撮影所関係の人だとか、町内の有志もきてにぎわったその講義に、菊野は参加していたという。

もっとも、田島はその頃十二、三だから、檀信徒の中に年ごろの娘や、芸妓がまじっていても、気にしてはいなかった。茶や「きしめん」の給仕に忙しいばかりでなく、紅い襟をのぞかせた若妻や娘がいても、それは子供だった田島には黒みどりの樹間に映える庭の下紅葉したもみじぐらいにしか眼にうつらなかったはずだ。

山門前の鳥原というタバコ屋は、兄弟子や老師さまの喫^すわれる「あやめ」や「白梅^{しらうめ}」を買いにいったので、店番の娘さんには、多少の記憶はあったが、風貌もすっかりうすれてしまっていた。驚いたことは門前のタバコ屋の娘さんと一しょに、上七軒の芸妓が、この法話をききにきていたということだった。いったい、だれにつれてこられたのだろう。六祖檀經など、若い娘にわかったものだろうか。菊野は、しかしおもしろい法話どした、ようおぼえとります、というのだった。

「飯炊きの坊さんが、えらい坊さんよりも、大事にされはるはなしどっしゃ」

という。田島はあっけにとられて菊野の顔を瞞^みめずにはおれなかった。三十年前に田島は寺を捨てた。京都を逃げ、それから今日まで東京で暮^くしている。時どき京都へはくるけれど、知人はもうどこにもいなかった。それだけに、むかし、暮^くした衣笠山麓^{せんろく}や、北野、千本^{せんぽん}のかいわいがなつかしくもあり、所在ないままに、一日じゅう、町あるきをして楽しむことはあっても、十二、三の頃に顔見知りだった知人に会うためしはないのだった。小学校の友はみな音信不通になっていたし、中学の校友も、年まわりがそうだから、戦死した者が多い。

音の

「わたしのことをおぼえているのかね」

鐘

「へえ、あんたはんは、まだ、ちいそおした……こんなやつた」

と、しなやかな、まだえくぼのできる白い指をそろえて菊野は田島の肩の高さあたりへさしのばしてみせて、

「いつも、四、五人の小僧はんが、衣の袖をうしろにくくって、腰をたこうたくしあげはって、箒^{ほうき}もって庭はいてはりましたわ」

といった。毎日、兄弟子に叱られながら、作務^{さむ}にしたがった日々を忘れてはいない。たしかに、毎日のように、秋がくると木の葉が庭を埋めたので、掃いてばかりいたものだった。結局、こんな寺の生活がいやで、田島は十九の時にこの寺を脱走しているのだが、その田島に見おぼえがあるというのは、菊野の言葉にいささかの誇張があるとはいえ、庭掃除の風景を見ているのなら、そこに田島がいても不思議ではなかった。否定はできないのだった。背がひくくて、芋虫のようだった田島は小学校卒業時の写真さえ、のちに指でこすって破ってしまっている男だが、それほど、寺で暮した少年時は劣等感で終始していた。いま思いだしても身がちぢむ思いなのだった。

田島は菊野の年がわかって、はっとした。そんな頃、法話がきけたのなら二十は越していたろう。とすると、菊野はいくつになるのだろう。

「いくつだったのかね……あれは、茶の木を植えたのは風水害の直後だった。たしかに、そう

だったよ」

「十九ウどした」

と菊野はこたえた。

「西陣にな、活動写真に衣裳を貸してはった宮地さんちゅう旦那はんがいやりましたん。この方が、石見先生やらとたいそう懇意にしてはりましたさかいな。わたしら、まだ、子供どしたけんど、音羽姐さん、米香姐さんにつれられてゆきましてん。宮地さんどうしても、お寺まいりせい、お寺まいりせん人間がでけんいうて……無理矢理つれてゆかれましたんどすな。もう、その宮地さんも、米香姐さんも死んでしまわれましたわ」

菊野は淋しそうにそういった。話に出てくる石見先生というのは、当時、新興キネマの監督で大御所といわれた人である。たしかに鳥原のタバコ屋の離れに住んでいて、近くでよく撮影していた。この石見が、恋愛結婚した相手は、音羽である。すると、いま、健在なのは、この音羽と菊野ぐらいであろうか。田島が感慨ぶかけにはなしはじめるのを、Kは、もちまへのひっこんだ眼を炯^{ひか}らせながらにやにやしていた。菊野は、その夜は若返ったようなはしゃぎようで、しゃべりまくった。

鐘

田島は、菊野の五十にはみえない、白いむっちりした首のあたりや、キメのこまかいゆたか

な頬をみていると、複雑な気がした。中学は大徳寺にあったので、田島はゲートルをまいて、等持院を出ると、いつも白梅町から、北野天神裏を通って、この花街をぬけ、千本へ出たものだった。毎日の通学路である。途中の機屋はたやからはカチコチと機はたの音がしたのに、朝早い上七軒の道は、水を打ったような静けさで眠っていた。時たま、格子戸があくと、朱の長襦袢の袖に手をすくめた妓が、流連いつづの客を送りだす風景も見られた。そんな時、田島は、剃りたての坊主頭にのせている学帽をかぶり直し、下をみて走りすぎたものである。菊野が十九だったとすると、あるいは、雑魚寝ざこねの客を送り出す襦袢姿をみているのかもしれない。

「あんたも、わたしも本孝老師の法話をきいて育った仲間やな」

という、菊野は、しんみりとして、ほんまどす、といった。

「あの法話は、いつまでも、心の底にしもうてありますのや。あれは五祖大師ちゅうて、達磨だるま大師はんから、五代目の老師さんが、あとつぎをきめよと思うて困らはる話どっしゃ。いちばん、上座の神秀さんが、当然、あとつぎになららん規則やっただんどすけど、五祖さんがえらい人やったために、詩をかいて、立派に合格したもんにあとをゆずるいうて……お弟子さんに云わはんのどっしゃ。神秀さんも頭のええ人やったさかい、えらい詩をかいて、壁に貼りだしとかはったけど、結局、飯炊きしてはった乞食みたいな坊さんの方が、えらい人やった